
最強機神 武雷我

幻龍総月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強機神 武雷我

【Nコード】

N6612R

【作者名】

幻龍総月

【あらすじ】

3011年、ゲームが強い以外は普通の高校生「あらがみらいた荒神雷太」は平凡な毎日を過ごしていた。ある日、幼馴染の「さのみなつ佐野美夏」が隠しごとをしているのに気づく。と同時に、謎の巨大生命体「ヴイレンヴイレン」に襲われる。そして美夏は「さいきょうきしん最強機神 武雷我」を召喚する。雷太は武雷我に乗り込み、ヴイレンと戦う事に…。

序章

2991年、世界は平和を手に入れようとしていた。

紛争、宗教問題、少子高齢、人権、差別、自然災害など様々な問題は解消され、平和と呼べる日がすぐそこまで、目の前にあった。

しかし、そんな平和も長くは続かなかった。

2992年12月25日、世界各地の都市に正体不明の爆発が発生した。

爆発は最大3?にもおよび、178ヶ所で発生した。

爆心地には、巨大なクレーターができ、全てが灰となり、何も残らなかった。

後にこの爆発は『黒い核』、『クリスマス・クライシス』と呼ばれるようになった。

2997年、追い打ちを掛けるように、謎の巨大生命体『ヴェイン』が襲撃をかけた。

まだ完全に傷が癒えていない状態だった人類には大きな打撃となった。ありとあらゆる兵器を用いて抵抗したが、ヴェインの勢いを止めることができず、苦戦を強いられた。

3004年、ある考古学者が古代遺跡から巨大兵器を発掘した。その巨大兵器は若い女子を選び、『巫女』として覚醒させた。それは巨大兵器の覚醒でもあった。覚醒した巨大兵器はヴィレンを一掃し、壊滅寸前まで追い詰めた。危険を察したヴィレンは姿をくらし、人類を襲うことはなくなった。

またヴィレンが襲ってくることを考え、巨大兵器を元にして『対ヴィレン人型戦闘機・VFF』が開発された。

巨大兵器は1体だけではなく世界各地の古代遺跡で発見された。その数は200前後。後に巨大兵器は総称して『鋼鉄巨人』と名付けられ、『鏢王機種』、『獣王機種』、『黯王黒種』、『聖王神種』の四種類に分けられた。

3008年、ヴィレンは様々な進化を遂げて、人類を再び襲った。そして3011年、

現在もヴィレンとの戦いは続いている。

序章（後書き）

初めまして、幻龍総月です。初めてネットに載せるので緊張してます。初心者なので、ミスすることがあるかもしれませんが、応援よろしくお願いします。

第一話 Part 1

新天日本

500年前、当時の政権が崩壊したのと同時に経済も崩壊してしまい、国は滅亡した。国民は力を合わせて経済を立て直し、新政権を発足。ありとあらゆる悪い点を潰し、良い点を守り、新しい国として再興を遂げた。新しい国として再発進をするにあたって国や地方の名前を変えることにした。色々候補があったが、最終的に『新天日本』と決定した。都道府県には『新』と付けることにした。

その国の新神奈川県内、

朝7時、とある商店街の近くの一軒家。その家の2階、1人部屋に置いてある目覚まし時計が鳴り響く。その部屋で寝ている少年は布団の中でモゾモゾと動いてから目覚まし時計のベルを止める。

「……後5分」

そう言って二度寝を開始する。

「雷太^{らいた}、早く起きなさい。遅刻するはよー」

「……はい」

雷太と仕方なく起きて学校へ行く準備をする。制服に着替えると、1階の居間へ向かっていく。

荒神雷太^{あらかみらいた}。体型はスリムで、髪型はショートで黒、目は緑色をしている。

「おはよう、母さん」

「おはよう雷太。朝ごはんとお弁当、作っておいたからね」

「ありがとう」

テーブルに用意されていた朝ごはんを食べ始める。

「そういえば父さんと雷菜^{らいさい}は？」

「お父さんはさっき会社に出かけて、雷菜は早朝に仕事へ行ったわ
「お」

「そう……」

あらがみらいな
荒神雷菜。雷太の妹で、アイドル歌手をしている。最近売れ始めて忙しい日々を送っている。そのため、顔を合わさずに1日を終えることが多くなった。何だか寂しい。

「ご飯を食べ終えた後、食器を片づけて学校へ行く。」

「じゃあ母さん、いつてきます」

「いつてらっしゃい。車には気をつけるのよー」

「はい」

7時32分

バス停でバスを待っていて、暇つぶしにゲーム専門誌を読んでいた。

「おーい雷太。おはようだね」

後ろの方から女子の声が聞こえたので、振り向くとそこには、赤いボンでポニーテールをして、目が茶色をした女子がいた。彼女の名前は佐野美夏さのみなつ。雷太の幼馴染で、変わった喋り方をする。

「よお、ナツ。おはよう」

「元気そうだなによりだね。それはそうと、今日の放課後ゲーセンに行くのかね？」

「ああ、新しく入った『喧嘩上等！』って言う格ゲーが稼働したみたいだから試しにやってみようと思って」

「私も付いていつていいかね？」

「別にいいけど」

「じゃあ3時25分当たりに校門前で待っててね」

「ああ、分かった。あつ、そうだ。来月の第3金曜日に雷菜のコンサートがあるんだけど、一緒に行かない？」

「お？チケットがあるのかね？」

「いや、雷菜がプロデューサーさんに頼んで取ってくれるんだって」「雷菜ちゃん、人気者になっちゃったからねえ、チケット取るの難しいんじゃないかね？」

「新千葉の方で販売された特別席のチケット、開始4分で完売したって話だ」

「ニュースでやってたね。他にも同じ事務所のアイドルが参加するコンサートだから入手困難だそうだってね」

「うへえ……、大丈夫かよ……」

「まあ私はチケット取れたら行くけどね」

「そうか、じゃあチケット取れたら連絡するわ」

「頼んだね」

そうこう話しているうちにバスが来た。2人はバスに乗り込み、学校へと向かう。

第一話 Part 1 (後書き)

第一話です。ミスが少ないことを祈りつつ、投稿します。

第一話 Part 2

新神奈川県内 かさまえ 風前高校

午後12時34分

午前の授業が終わり、昼休みになった。あるものは購買で昼ごはんを買いに行ったり、あるものは早めに昼ごはんを食べてグラウンドに出て運動しにいたりする。

そんな中、荒神雷太は校内をうろろしていた。

別に昼ごはんを早めに食べ終えた訳ではなく、ただ人探しをしているのだ。

「……ナツの奴、あっちから一緒に昼飯食べようって言ったくせに、4分も遅れるなんてどういっつもりだよ……」

その時、美夏が階段の陰にいるのを発見した。さつきまで愚痴ていたが、何をしているのか気になりこっそり近付いた。見ると、携帯で誰かと話していた。

「……はい、わかりました。準備の方はこちらで……はい、はい。後のメンバーには？……わかりました、お願いします。……ええ、覚悟はできてます。……はい、それではこれで失礼します……」

小声で誰かと話していたみたいだが、その内容よりも気になったのは相手側の方だ。いつもとちがう喋り方になるのは初対面の人と会話する時と、先生や親などの目上の人と会話する時のみだ。そのことに本人は気付いてないみたいだが、雷太は長い付き合いでよく知っている。

(一体……、誰と話していたんだ?)

電話の相手が誰なのか気になったが、とりあえず話しかけることにした。

「よう、ナツ」

「!!! ら、雷太?! いきなり何だね!?!」

「そう慌てんなよ。なかなか戻ってこないから探しに来たんだよ」

「あつ、ああ、そうだったね。ごめんごめん、ちょっと先生に呼び出されてね」

「へえ、そうなんだ」

美夏は嘘をつくのが下手くそである。故に、さつきから声が震えっぱなしである。

「そ、そんなことよりもね、お昼食べに行こうよね」

「はいはい」

美夏が嘘を付くほど、さつきの会話は秘密にしておきたいのだろう。それなら、いつか話してくれるのを待とう。と、心の中で思った。

午後3時40分

雷太と美夏は学校から歩いて10分ほどのところにあるゲームセンター『ドッグファイト』に足を運んでいた。この町ではかなり大形で、10代から20代の若者に人気がある。その一角、格闘系ゲームコーナーに2人は向かっていた。

「それで、雷太の言っていた『喧嘩上等!』ってどんなゲームかね?」

「それがよくわかんなくてさ、システムがゴチャゴチャし過ぎてやりづらいかもしれないんだよ、その上コマンドも多い。技の組み合わせも複雑だから、上級者向けかもしれないんだ」

「あー、雷太の予想は大体当たってるかもね」

見ると、テンプレートに『最新ゲーム、喧嘩上等!! 絶賛稼働中!!』とデカデカと書かれているが、そこには人が全然いなかった。

「……難しすぎて誰もやってないのかな……?」

「多分そうだろうね」

「……………」

少々呆れ気味に溜め息をついたが、懐から財布を出してゲーム機に1000円を入れた。

「やる気かね?」

「まあ、やれるところまでやってみる。文句はそれからだ」

「雷太らしいね」

「そんじゃ、ゲームスタート!」

BGMとともにPVが流れ始める。しかし、PVに出てくるキャラクターは番長だったりスケバンだったりしていまいちぐつとこない。途中から萌え系キャラやロリキャラもいたが、どうみても無理矢理入れた感満載だった。

「……PVの時点で製作スタッフに文句言いたくなってきた」

「耐えるね」

PVが終わり、モード選択になった。

「えっと何々……、『アーケードモード』に『ストーリーモード』、

『ハードモード』とかあるのか」

「ここら辺は他の変わりないね……」

「まあとりあえず『ストーリーモード』をやってみるか」

レバーを動かして『ストーリーモード』を選択すると、キャラクター選択に移った。ここで、あることに気づく。

「……………このキャラ北斗の」

「*おおつとだね*」

危うくNGワードを言い出しそうだったので途中に割って入る。

「しかもこっちは涼み」

「M A T T E ! ! N E ! !」

これ以上は危険なのでささと先へ進ませたのだった。

第一話 Part 2 (後書き)

いつになったらロボット出てくるんだよ、って思っている方もいると思います。後もうしばらくしたら出ますので、勘弁してください。ホントすいません。

第一話 Part 3

午後3時55分

「……やっぱり見てもすごいね、雷太」

美夏は今まで何回もこの光景を見てきたが、驚きを隠せずにいた。それは、

「これで………とどめ!!」

雷太が『喧嘩上等!!』をノーミスで40連勝していたのだ。

(……大体のゲームの操作をコントローラーを見ただけで把握しちゃうっていうのはチートだよ……。しかも呑みこみがめっちゃめっちゃ早くてすぐ強くなっちゃうしね……)

彼は昔からゲーム好きで、一週間に5日は必ずゲームをしていたのを覚えている。それ故に、より効率良くゲームをしたい、そして、誰よりも強くなりたいがために磨いた技だと言っていた。

「雷太って本当にゲーム好きだよな」

「まあな。だって俺これくらいしかとりえないもん………ん？」

その時、画面にいきなり『挑戦者現る!!』と文字が表示された。そこで向こう側の席に誰かいるのに気づいた。

「お。ジュンにテツ、コージョー、それにケイ、来てたのか」

「久しぶりだな、荒神雷太。 実に3日振り、いや、4日振りだな」
そう言っただけであいさつしたのは向かい側の席に座っている、髪が紺色でショート、目は黒色でメガネをかけた少年だった。

織田純一おだじゅんいち。ちがう高校だが、ゲーム仲間仲間仲がいい。名前をフルネームで言うある意味めんどくさい奴だ。

「いやあ、おっ久々。元気してたかなあ？」

その後ろにいるかなり軽いノリで喋る髪が茶色のチリチリ天パで、目は深緑色をした少年。

九鬼鉄哉。織田と同じ高校で同じゲーム仲間である。

「ダッハハハハハハハ！ たった4日しか経ってねえのに久し振りっておかしいだろ！！」

その隣にいるやたら大きな声で喋っている髪が赤色のロングで、目も赤色をしている少女。

宮本紅城。九鬼の中学からの知り合いで、こちらにもゲーム仲間である。

「お久」

さらにその後ろにいる口数の少ない髪と目は黒色で左目に眼帯をつけていて、ミディアムヘアの少女。

村上景子。織田の幼馴染で、こっちは何故かいつもいるだけだ。

それぞれあだ名は名前からもじって、『ジユン』、『テツ』、『コージョー』、『ケイ』と呼ばれている。

「あれ？ ジユンってこのゲーム初めてじゃない？ 少し慣らしてからのほうがいいんじゃない……」

「甘いな、荒神雷太。これは2日前から稼働していてな、私は2日前からこのゲームをプレイしている。使うキャラクターは『華唄剣磁』だ」

「げっ、リーチ長いからあんま相手したくない奴でくるのかよ……」

「そういう荒神雷太も近距離を得意とする『吉良星アメリ』だろう。試合開始のゴングが鳴った。その瞬間、目で追い付けないほどの速さでコントローラーを動かし、ボタンを押しまくる。画面のキャラクターも目で追い付けない速さで動きまくる。

「いや、すごいね。かわしながら攻撃加えてるけどお互いうまくくぐぐドしてるね」

「ギリギリで引いたり攻めたりして中々燃える試合だぜ！！」

「あ、雷太一発入れたね」

「がんば」

それが普通に見えているこいつらもタダ者ではないのだが、それをよそに

「……なあ、荒神雷太」

「なんだ？ ジュン」

少し間を開けて一言、

「『触手姫』の攻略が詰まったので手伝って欲しい」

その瞬間、周りのテンションが一気に下がった。それもそのはず、織田が言ったゲームは18禁のPCゲームだからだ。このゲーム仲間はそっち方面もカバーしているのだ。

「あれ？ この前『ドラキュラパニック』触手と薔薇は血の香り』プレイしてなかった？」

「それは5日前にクリアした。買い溜めしておいたうちの1つなのだが、バッドエンドでいつも終わってしまうのだ」

「うーん、それはもうメモしながら一からやり直すしかないだろう」

「……少々面倒だががんばるしかないようだな」

「仕方ないだろうね、この前やってた『Hガールズ』も結構面倒くさかったから」

「何だ荒神雷太。魔法少女と妊婦に萌えているのではなかったのか？」

「そういうお前だって、西洋系お姫様と触手プレイには興味津々だろうが」

「その組み合わせは私の中では最強だから何回でもおいしい」

「あ、そう。でもまあ、」

一拍置いてから、

「「幼馴染にそんなことやってくれと言っててもダメだろうな」」

この後、2人がそれぞれの幼馴染に血祭りあげられるのは言ってもない。

試合は話しながらも続いていたが、リアルファイトという名のリ
ンチが行われたため引き分けという形で幕を閉じた。

しばらく伸びていた雷太は近くの自動販売機で飲み物を買って飲
んでいた。

「おい、雷太。大丈夫かい？」

「ん？ ……ああ、テツか。みんなは？」

「あっちで待っていてくれるよん」

「……ナツまだ怒ってる？」

「まあ、さっきよりはマシかな？ とりあえず一緒にいこうぜ」

「……そうだな」

何だかんだでみんなのところに戻ったが、美夏がしばらく相手に
してくれることはなかった。

午後4時38分

某所

2人の人物がモニターでヴィレンとの戦闘を見ていた。

「……………どう思います」

「どうって、こりゃ新型で間違いないっしょ」

2人共女性の声だが1人は丁寧な喋り方で、もう1人は軽々しい喋り方だった。

「あいつら、何かここ数年で一気に進化してるからねえ、ちょっと厄介かもなあ」

「そうなりますと今の戦力では苦しくなってくるのではありませんか？」

「かもね。いくらココに2体あると言ってもパイロットがねえ……………」

「……………彼女のことですか？」

「そう。精神が安定しないせいか、出力が不安定でね……………ん？」

「どうしましたの？」

「……………」

ヴィレンを全て撃破したシーンを一時停止して、じっと見る。

そこであることに気付く。

「！！！ やばい！！！」

「だからどうしましたの?!」

「すぐにあいつらに連絡しろ！ 今すぐだ!!」

血相を変えながら、

「新型のヴィレンが地中に潜って移動してやがる!!! 間違いないく死人がでるぞ!!!」

第一話 Part 3 (後書き)

すいません!! あともう少し、あともう少しでロボット出て来ますんでそれまで勘弁してください!!

第一話 Part 4

午後4時39分

ゲームセンター・ドッグファイト

携帯電話の着信音が鳴り響く。6人はそれぞれの携帯電話を確認する。

「私のじゃないね」

「オレでもないわ」

「俺でもない」

「ああ、俺の俺の」

鳴ったのは雷太の携帯だった。電話だったので5人から少し離れる。

「もしもし、雷太だけど」

『あ、お兄ちゃん。今どこ?』

電話から、甘い声が聞こえた。

「今? 今ナツと一緒にドッグファイトにいるけど」

『あのね、仕事が早く終わったから5時に駅前まで向かいに来てほしいの……ダメかな?』

「大丈夫だ、問題ない。いつもの駅前でいいんだろ?」

『うん』

「気をつけて帰ってこいよ」

『うん! お兄ちゃん大好き!』

そう言って電話が切れた。雷太はみんなのところに戻る。

「誰からだったかね?」

「ああ、実は……」

次の瞬間、サイレンの音が鳴り響き、ハザードランプが光りだした。

「ここから10?以内にヴェレンが出現しました。ただちにシエルトーに避難してください。繰り返します。ここから10?以内に……」

店のアナウンスが切り替わり、避難指示のアナウンスが繰り返される。係員の人が出てきて

「お客様！ あちらの非常口からシエルトーへ向かってください！ 慌てず、素早く移動してください！ ご協力お願いします！！」

「な!? ヴェレン!?!? くそ、こんな時に来やがって！ ナツ、早くシエル……」

周りを見渡すと、近くにいたはずの美夏がいなかった。

「あ、あれ？ ナツ、おいナツ!!」

大声で叫んでも反応がなく、人混みが流れ込んできて前に進みづらい状態になっていく。それをかき分けながら、前に進む。

その時、美夏が正面玄関から出ていくのが見えた。

「!!! おい待て！ ナツ!!戻ってこい!!」

必死に叫びながら正面玄関へ向かっていき、やっとの思いで外へ出る。

「ナツどこだ!!!」

左右を見て美夏が見えた方へ走りだす。しかし、ものすごい速さで走っていく。

「ナツの奴あんなに足速かったか?! ダアもう！ 全速前進だ!!」

全速力で追いかけて、お互い全速力で走り抜けていった。

午後4時54分

雷太は美夏を見失わないように後をつけていた。長時間走ったため、息切れが酷い。

「ナツ……、どこまで走るつもりだ……？」
角を曲がると、そこには

実に80mくらいある巨大な生物、ヴィレンがいた。

まるでSF映画に出て来そうな姿をしていて、両腕には巨大な蹄のような物が付いている。

雷太は息が詰まるほどの恐怖を感じた。

「あ、あ……。あ……」
同時に言葉も失った。

あの時と同じ、とてつもない恐怖

「あ……あつ、ああ……っ！！！！！」

美夏がヴィレンから数mの所にいるのを見つけた。

「ナツ！ 逃げる！！ 今すぐこっちに来い！！ 死んじまうぞ！！！！！」

美夏はその場から動かなかった。

その時、ゆっくりとその場で手を挙げていく

今ここに、幕が切って落とされる。

第一話 Part 4 (後書き)

やっと第一話が書き終わりました。念願のロボットも出せて良かったです。次回から武雷我が大暴れ!!! ご期待下さい!!!

第二話 Part 1

午後5時

周りの建物が夕暮れで茜色に染まり始めていた。そこに、2体の巨人がいた。

1体は、人類の敵であるヴィレン
もう1体は、人型の巨大ロボット

2体は敵対するような形で向き合っている。その光景を目の当たりにした少年、荒神雷太は呆然としていた。

「これは……まさか、鋼鉄巨人か……？」

世界に200前後しかない鋼鉄巨人が目の前に現れた。だが、それ以上に驚いたのは、幼馴染である佐野美夏が鋼鉄巨人を呼び出したことだ。

「『汝の力、今ここに示すため、我と魂を重ねよ!!』」

気がつくのと、美夏が呪文のような言葉を言ってロボットに吸い込まれるように乗り込む。

「えっ?! ナツ! ナアアアツ!!」

必死に叫んだが、ヴィレンの近づく足音にかき消されてその声は届かなかった。

「くっ……!! ここはもうだめか!!」

ヴィレンとの距離が数mしかないのに気付き、その場から走って遠くに行く。

「ちくしょう……!! 俺は何もしてやれないのかよ!! くそ!!」

悔しい思いをしながら、何もできない無力感に苛立ちを感じながら走り続けた。

一方、ロボットに乗り込んだ美夏はコクピットにいた。

「システムオールグリーン。ギア、正常に作動。シンクロ率30.2%。リンクライン安全値。エネルギー循環異常なし……」

前と後ろの2つの席の1つ、前座席に座り、全てのプログラムをチエックしていた。

「戦闘サポートAI、ニンフ。起きてるかね」

『ステニキドウシテマス。ゼンリヨクデサポートシマス』

「よろしく頼むね」

そして、両方の操縦桿レバーを掴み、

「いくぞヴィレン……お前は私が倒すね!!」

ロボットを動かして目の前にいるヴィレンを殴り飛ばす。後ろによろめいた所に、さらに打撃を加えていく。

「はあああああああああああああああああああああああ
!……!」

反撃の隙を与えないように攻撃を続けていく。

「これで!!」

ボロボロになったところに最後の1撃を加えるために大きく振りかぶる。

しかし、それが裏目に出た。素早い動きで腹に右ストレートを入れられたのだ。異常に大きい蹄の威力はすさまじく、勢いにのって後ろに飛ばされてしまった。

「きゃあああああああああああああああああああああああ
ああ!……!……!」

そのまま後ろに倒れてしまい、大きな衝撃が襲う。

「くっ、ぐっ……」

すぐに立ち上がり、ヴィレンと向き合って、構えた。だが、後ろからもう1体のヴィレンが地面から現れた。

「なっ、もう1体いるのかね!？」

『レンラクガハイリマシタ。アノヴィレンハシンガタデス。シカモ

ハチタイイルソウデス』

「何!？」

次々と地面からヴィレンが現れ、8体に周りを囲まれた。

「これは万事休すだね……!!！」

遠くからヴィレンとロボットの対決を見ていた雷太は苛立ちを積みもらせていた。

「ナツ、なんでだよ……。ちくしょお……。!!！」

ナツの傍にいつもいた。小さい頃からずっと一緒に遊んだり、泣いたり、怒ったり、ケンカしたり、笑ったりした。だから悩んでる時、助けあったりした。嘘なんて付くこともなかった。それなのに、なぜ死ぬかもしれないところにいるのか、分からなかった。裏切られたと思った。でも、思いたくない。大切な、幼馴染だから、友達だから……。

「……何でだよ、ナツ。何でだよ……」
その時だった。

『うあああああああああああああああああああああああああ！

!……!』

下を向いていた頭を上げると、ロボットが8体もいるヴィレンに無茶な戦いをしていた。

『その人！ 早くここから……えっ?!』
美夏の声が聞こえた。間違いなくロボットからだった。

「えっ、な、雷太！ なんでこんな所に!？」

コクピットにいた美夏は驚きを隠せずにいた。

『どうした、民間人がいたのか!？』

通信画面から女性の声が聞こえた。その声はモニターを見ていた軽いノリで話す女性の声だった。

「い、いや、その、確かに民間人と言えば民間人なんですけど……」

『ん……？ あっ、荒神雷太君か。美夏ちゃんの幼馴染』

「そんなことよりもどうします！ このままじゃ巻き込まれてしまいますよ!!」

『……仕方ない。美夏ちゃん、彼をコクピットへ。後ろの席空いてるでしょ?』

「えっ！ でも……」

『隠してみたみたいだけど……、彼にはもうばれてるね』
「えっ?」

外部音声を聞くと、

『ナツ聞こえるか！ 聞こえるなら返事をしてくれ!』

「あ、あれ?! 何で……?」

『さっき外に聞こえる設定に変えてみたいだね。それではれたんじゃない?』

「うっ……」

『とにかく、さっさと乗せた方がいいかもね。ヴィレンがこっちに近付いてきてるよ』

「くっ……! ……分かりました、コクピットに乗せます」

ゆっくりと雷太を掴み、コクピットまで運んでいく。

『コクピットオープン』

コクピットが開き、美夏が顔を出す。

「飛び乗るね！ 雷太！！」

「うおりゃああああああああああ！！」

ロボットの手からコクピットへ乗り移り、何とか着地する。

「雷太、大丈夫かね？！」

「イテテテ、どうにかな……。つうかそれよりもナツ！！ どうしてこんなのに乗ってんだ！！」

「説明は後ね！ 今はこの状況をどうにかしないとイケないから、後部席でシートベルトをしとくね！！」

ロボットを動かして再びヴィレンの前に立ち、格闘戦に特化した構えをとる。

「ニンフ、どうにかして『サンダーソード』か『スパークレイ』を出せるようにしてくれないかね」

『ソレガデキタラサイシヨカラヤツテイマス』

「だよね、それじゃあ……」

レバーを握りなおして、

「正面から格闘戦だね！！」

ヴィレンに向かって突っ込んでいき、1体を殴り飛ばす。そのまま速さを殺さずに2体目の懐へ入り、アッパーをブチ込む。だが、他のヴィレンから巨大な蹄を使った攻撃を受け、その場に薙ぎ倒される。

「きゃあー！」

「うああああー！」

倒された衝撃がコクピットを襲う。どうにかして立ち上がるうとするが4体に同時攻撃をくらい、うまく立てない。

「うぐう！ こんな……ところで！」

一瞬の隙を突いて、どうにか抜け出したがロボットはダメージが溜まったためか、フラフラした状態に近かった。

『ソウコウガモチマセン！ テツタイシテクダサイ！！』

「今引いたら民間人に被害が出るね！ 1秒でも多く足止めしない

と……！」

「……………」

雷太は黙ったままある一点を見ていた。

「くっ……！ ダメージが以外と響いてるね……」

攻撃をどうにか受け流し、反撃を加えながら防御する。しかし、後ろから殴られ、倒されてしまう。

「きゃあああああああああ……！」

倒された衝撃に声を上げてしまう。

「くっ、ぐっ……」

『ミナツサン！ ウエー！』

「っ……！」

見ると、巨大な蹄が天高く上げられ、今にも降り下ろそうとしていた。

（ここまで……か……ね……）

強く目を閉じて、死を覚悟した。

だが、

「諦めるにはまだ早いぞ、ナツ……！」

目を開けると、雷太が被さるようにして寄りかかってきた。

「えっ！！！！ ラ、雷太！！？」

「いいからジツとしてろ！！」

美夏の手の上に雷太の手が重なる。そしてレバーを操作し、ロボットを動かす。

「どおりやああああああああああ！！！！」

勢いよく倒立し、大きく飛び越える。ヴィレンの攻撃をかわすと同時に、後ろへ回り込む。蹄を振り下ろしたが、いないことに気づき、周りを見回しても見つけられずにいた。

「こつちだノロマー！」

後ろから殴り飛ばし、3回転しそうな勢いで吹っ飛んでいく。他の2体も巻き添えをくらい倒れ込んだ。

「さっきのお返しだ」

「……………あの、その、ライタ」

「ん？」

「……………近い」

雷太と美夏は体を密着させ、顔の距離は5cmもなかった。美夏は頬を赤くして少しもじもじしていた。

「ああ、悪い悪い。出来れば座席変わってもらいたんだけど……………」

「そ、そうするね」

そそくさと後部席へ移り、前部席と交代した。レバーを強く握り締め、ロボットを戦闘態勢にする。

「サポートはこつちですね。ニンフ、お願いね」

『マカセテクダサイ』

「準備はいいみたいだな、そんじゃ……………」

「まとめて……、ブツバアアアアアアアアアアアアアアアアアス！！」

第二話 Part 2

午後5時30分

ヴィレンとロボットの激闘が始まった。

先にロボットの方がヴィレンに突撃した。それをかわそうと後ろへ下がるが、猛スピードで迫ってくるため、かわせなかった。そのままタツクルを受け、吹き飛んでいく。周りにいた数体も巻き添えをくらい倒れていく。そのまま休むことなく倒れた数体に向かって腕を目にも止まらぬ速さで叩きつける。

「『烏龍盤打』!!!」
うりゅうばんだ

雷太の叫びと共に放たれた技は胸に直撃した。骨と肉が碎ける音が響き渡り、中で何かが潰れるような音もした。

「? 何の音だ?」

「!!! 雷太離れてね!!!」

「?」

ピクリとも動かなくなった瞬間、いきなりヴィレンの体が光り出した。

「!!!」

咄嗟に距離をとり、ロボットを伏せさせた。直後、眩い光とともに爆発した。

「な、何で爆発すんの?!」

「ヴィレンには核融合炉みたいな物が詰まってるみたいでね、死ぬと爆発するね」

「迷惑な設定だな」

『ヴィレン、サнтаイゲキハシマシタ』

ロボットを起こすと、奥にいた2体が突っ込んできた。何とか蹄の攻撃をかわし距離をとる。一気に距離を詰め、目の前で顔より少し上くらいのところまでジャンプする。体を捻りながら体全体の力を使って回し蹴りを放つ。

「『超撃旋風脚』!!!」

2体まとめて蹴り飛ばし、首の筋肉が引き千切れるような音を響かせながら宙を舞っていく。そのまま地面に落下し、動きが鈍くなつた。

「今だ!!!」

ロボットをより高い位置に飛び上がらせ、回転を加えながら蹴りを放つ。

「『螺旋烈刃蹴』!!!」

重なったところの中心に直撃し、2体の体を貫通する。体操選手のように飛び上がり、ヴィレンから距離を取る。そして2体のヴィレンは爆発した。

『ニタイゲキハ。ノコリサントイ!!!』

「いける、いけるね雷太!」

「残りもさつさとブツバズぞ!」

「わかつてるね!」

残っているヴィレンの方を見ると、何かおかしかった。よく見ると

ヴィレンの肉体が溶け出し、一つのヴィレンになったのだ。

「な………に………?」

雷太は驚きを隠せなかった。

身を守るために体を液体のようにする生物なら知っている。しかし、一つの生物になるために溶ける生物なんて、見たことも聞いたこともない。

「まずいね! 『第二形態』になるつもりだね!」

「だ、だいにけいたい?」

「原理はわからないけど、ああやって体を溶かして一つになるね。それを『第二形態』と呼ぶね。あの形態になるとパワーも頑丈さもけた違いになるね」

「それって……、まずくないか………?」

『それはこの戦線を勝利して生きていたら教えよう』

「……そうかい」

「それより所長、この状況を打破できるって本当なんですか?!」

『本当だとも。ワツタシを信じなさい』

「はい、信じます!!」

美夏がここまで心を許す相手がいる事に少し驚く。

『よつろしい、では教えよう。その方法とは……』

少し間をおいてから

『「イントラクト」雷太君と契約することだよ!!』

「……こんとらくと……?」

あまり聞きなれない言葉に雷太は疑問符を浮かべる。

「ほ、本気で言ってるんですか所長!! あれは危険です!!」

『不安がるのも無理ないか……。でもなっちゃん、今はそれしか方法がないの』

急にやさしい口調になった。

「でも……」

『巻き込みたくない気持ちはわかる。けどもう誤魔化しは利かないのよ』

「……」

『大丈夫、彼なら絶対断つたりしないから』

「……さっきから何の話をしているんだ?」

雷太が後ろを振り向くと、美夏が真っ直ぐこっちを見ていた。通信も切れていた。

「雷太」

芯の通ったような真っ直ぐな声だった。

「……私と……」

少し間が空いてから

「私と……契約して」

「……契約って？」

「このロボット、武雷我の正式なパイロットになってもらいたいね」「そうするとどうなるんだ？」

「これをあなたの意思で呼べるようになったり、超人になれるね」

「……デメリットは？」

「……いつになるかわからないけど……」

言葉を濁らせながら

「武雷我に吞まれて……死ぬね」

「っ……」

息が詰まった。でも、

「……それだけなんだろ」

「え……？」

「デメリットだよ。いつかって言ってもそんなすぐじゃないだろ？
なら俺は」

「俺は……、契約する」

迷わなかった。何一つ、何も迷うことなく、答えた。

「雷太……」

美夏も目を見てわかった。何一つ、迷っていないことを。

『ノコリ500メートルマデセツキン!!』

「早速始めてくれ、美夏!!」

「わかったね、雷太!!」

お互いの手を握り締め

「我、汝にこの力を与えん！ 汝、力を欲すればこれに答えよ！

！』

拳からエネルギー波が放たれ、ヴィレンは上空に舞い上がりエネルギー波に吞まれていき消し炭になっていく。そして、最後には塵一つ残らなかつた。

「勝つ……た……」

雷太は安堵の息を吐いた。

午後5時58分

新型ヴィレン8体、殲滅。

第二話 Part 2 (後書き)

どうも、幻龍総月です。ミスがないことを祈っています。

第二話 Part 3

午後6時20分

2人はヴィレンを倒した後、自衛隊の人達に連れられて地下に降り、見知らぬ部屋に入れられた。もう10分は経ったと思われる。その間2人は一言も喋らなかった。

「……………」

「……………」

さらに5分が経とうとしていた。

「……ねえ、雷太」

最初に切りだしたのは美夏だった。

「何だ、ナツ」

「その、あのね。えっと……………」

「……………」

また沈黙が始まる。そして、数分後。勢いよく雷太の方に顔を向ける。

「ごめんね！！ 雷太！！」

思いつきり頭を下げる。雷太は微動だにしなかった。

「騙すつもりはなかったね。でも、戦いには巻き込みたくなかったね。だって、だって…………大切な幼馴染だから！ 今までずっと近くに来てくれた、とつてもとつても大切な幼馴染だから！ だから、巻き込みたくなかった、戦いで死んでほしくない、守りたかった！ 独りよがりかもしれないけど、それでも雷太にはいつもの雷太で居てほしくて…………ごめんね、ごめんね雷太…………」

全て言い終える前に、大粒の涙がこぼれ落ち、座っていたソファの一部が濡れていた。

「…………もういいよ、ナツ。顔上げろよ」

顔を上げると、微笑んだ顔が目飛び込んできた。

「俺も最初は裏切られたと思った。だけど本当はお前のやさしさだ

クさせていた。

「どうしたの、ナツ？」

「い、いつからそこにいたんですか、所長」

「所長……？ ……あ！」

武雷我の中で聞いた声だということに気付いた。

「あんたあの時コクピットに話しかけてきた人か！」

「ピンポン、正解だよ！。言ったら、戦線で勝利したら教えてやるって」

「ああ、そういえば……」

「そんなことよりも所長！ いつからここにいたんですか！？」

かなり慌てながら尋ねた。さっきの事を他の人に聞かれたくないようだ。

「んー？ ついさつき来たばかりだけど。後始末に時間掛ってさあ

ー、もうやんなちゃうよまったく」

「そうですか……。良かった……」

「？ まあそれはいいとして、あー、荒神雷太君。君の今後について話しておきたいんだけど、いいかな？」

雷太は眉をひそめた。武雷我の契約者コントラクターになつたからには、何かあるとはおもっていた。

「……俺は今後どうなるんですか？」

「うーん、そうだねえ……」

緊張と緊迫が張り詰める。唾を飲み、言葉を待つ。そして、輝宮の口が開く。

「別にいつか、こっちで適当にやっつくから」

「だあああ……！」

あまりにも気の抜けた返答だったので、その場でこけてしまう。

「て、適当って……、いいのかよそんなんで」

「安心するね雷太。私の時もこんな感じだったからね」

「……そうですか」

「まあ今後なっちゃんを通して連絡することもあるから、そんなとき

声をぴったり合わせて同時に言う。

「ナツ！いつもの駅に一番近い出口ってないの！」

「それなら103番出口だね！こっちだね！」

「うおおおおおおおおお！！！！ 待ってる雷菜あああああ

ああ！！！！！！」

「気をつけて帰れよー」

「「わかってまああああす！！！！」」

2人はこの後30分近く走り続けることとなった。

第二話 Part 3 (後書き)

どうも、幻龍総月です。久し振りに投稿します。待たせて申し訳ございませんでした。

第三話 Part 1

午後7時30分 駅前広場

忙しく動く人混みの中で少女が1人立っていた。

スタイル抜群で、身長はやや低めに見える。顔は大きなサングラスと帽子で良く見えない。その少女に近づく2人の人物がいた。

「はあ、はあ……、あー、もう走れん」

「な、情けないね、雷太。それでも男の子かね……」

「それってジエンダーって奴じゃないか？ ナツ……」

荒神雷太と佐野美夏だった。かなりの距離を走ってきたため、息切れがひどかった。

「……遅い」

ぼつりと一言呟いた。その声には怒りの感情が交じってるようだった。それを聞いた雷太は慌て始めた。

「あ、いや、あ、あのな、これには訳があつてな、その、えっと、あの」

「……遅い遅い遅い遅い遅い遅いおつそおおおおおおおおおとおおおいいい！！！！！！！！！！」

少女はいきなり大声で叫んだ。近くにいた人達の視線が一気に集まる。雷太はさらに焦りまくる。隣にいた美夏も焦り始めた。

「ご、ごめん！ 謝る！ だからここで大声で叫ぶのは……」

「バカバカバカバカバカ！！！！ お兄ちゃんの大バカ！！ 何で2時間30分も遅れてくるのさ！！ 私が今までどれだけ待ったか分かる！！」

「雷ちゃん、ちょ、ちょっと落ち着こう。ね？」

「ナツ姉ねえはちよつと黙ってて！！」

「だからな、あのさ、ここじゃほかの人の迷惑になるから別の場所に移動しないか？ な？」

「そつやって話を逸らそうとして！ 今回はそうはいかないんだか

らね！」

周りの人達の視線がさらに集まる。そのうちの数人が、

「あのさ、この声ってライナちゃんに似てない？」

「言われてみればそうかも……」

「もしかしてあれ、ライナちゃん？」

周りの声にもっと焦り始める。

「と、とにかくこっちに来る！」

「わっ！」

この状況を打開するためにまず場所を変えるために、少女の手を掴んで引つ張る。ところが、バランスを崩してしまい、雷太の胸に倒れ込んだ。その拍子で帽子とサングラス地面に落ちた。

「「あつ」「

雷太と美夏は同時に言葉が漏れた。

「あたたたた……、何するのさ、お兄ちゃん」

胸に埋めてた顔を上げる。その顔は誰もが『カワイイ』と言ってしまつほど可愛らしく、黒色のセミロング、目は緑色をしている。

あらがみらいな
荒神雷菜。人気アイドルで雷太の妹である。

「……雷菜」

「？ 何い？」

「逃げるぞ……！」

「えっ？ きゃあ!？」

雷菜をお姫様だっこして人混みを駆け抜ける。美夏もすぐに後を追った。周りの人達は呆然としていた。そのうちの男2人が口を開く。

「……なあ」

「……なんだ？」

「……俺一目惚れしちゃった」

「奇遇だな、俺もだ」

午後7時50分 カラオケボックス

人混みから逃げてきた後、人目の付かないところで話をするためにカラオケボックスに入った。

「うん……、うん……。じゃあお父さんにもよろしく言っというてね。……ありがとう、母さん。それじゃ」

携帯電話を切って、2人のいる部屋に戻る。

「母さんにいつといた。2人と一緒にいるならいいってさ」

「こつちもOKもらったね」

「……それじゃあさっそくだけど」

2人は雷菜に向かい合うように座り、

「「本当にごめんなさい」」

雷菜にふかぶかと頭を下げる。当の本人は腹を立てていて、ふてつていた。

「……プーンだ」

「えつとね……、理由なんだけどね……」

「実はさ……、ヴェレンと防衛軍の戦闘に巻き込まれちゃって……」
雷菜はいきなり立ちあがった。2人はビクリと肩が震える。

「何でそれを先に言ってくれないの!」

「え、いや、だって……」

「ケガは! 2人ともケガはしてない?!」

急に血相を変えて近付いてくる。

「大丈夫、どこもケガなんてしてないから……」

「本当に?! どこもケガしてない?!」

「本当だね、ライちゃん」

「………本当?」

「ああ、本当だ」

「ウソだと思うなら今ここで脱ぐけどね」

「さすがにそれは勘弁してください」

「そう……、良かったあ……」

安堵の表情を浮かべてソファに座る。雷太は立ちあがって雷菜の頭を撫でる。

「ごめんな、心配かけて。でも大丈夫だから。な？」

「……うん……」

自然と三人の顔から笑顔がこぼれた。

「それじゃ、せっかくカラオケボックスに来たんだ。なんか歌おうぜ」

「そうだね。ライちゃん、何から歌うかね？」

「え？ 私？」

「まあ、一応詫びということ……」

「ライちゃんから、ね」

「……わかった、許してあげる。今回ばかりは仕方ないもんね」

「ありがとう、雷菜」

そう言われて、少し照れていた。

「えへへ………あっ」

何か思い出したのか、持っていた手提げバックから何かを取り出した。

「はい、お兄ちゃん。これ、頼まれてたチケット」

「お！ ありがとう雷菜！ ……ん？」

渡されたのは、ペアチケットとシングルチケットの二枚だった。

頼んだのはペアチケット一枚だけだったはず……。

「なあ雷菜。このシングルチケットは？」

「あれ？ お兄ちゃん、聞いてないの？ それユージ兄の分なんだけど……」

「……ああ、あいつのか……」

雷太は急に不機嫌になる。『ユージ兄』の説明は、また別の機会に。

「これは俺から渡しておくから、隣のクラスだし」

「わーい！ ありがとうお兄ちゃん」

「ライちゃん、早く早くね。曲、入力しといたからね」
「あ、うん！ 今いく！」
そう言っつてマイクを持ち、決めポーズをとる。
『みくんな私にビリッちゃえ』
そうして、楽しい時間が過ぎていった。

午後8時42分

時間になつて料金を支払い、三人はバスで帰宅していた。
「楽しかったな」

「うん！ こうやって三人で遊ぶのって久し振りだね」

「ああ、そうだね」

「雷菜、明日は仕事ないんだっけ？」

「うん、だから明日は学校に行こうと思ってるの」

「そうか」

「じゃあ、明日は三人でいこうかね」

「うん！」

そして、家の近くのバス停で三人は下りた。

「それじゃあね。雷太、ライちゃん。また明日」

「ああ、また明日」

「じゃあね！ ナツ姉」

2人は並んで帰り道を歩いていた。

「あ、そうだお兄ちゃん」

「なんだ？」

「帰ったら一緒にお風呂入ろう！」

「ああ、いいぞ」

ちなみに、この二人はこの歳になっても一緒にお風呂に入っています。

ラグナレク基地 地下格納庫

輝宮紗々羅は1人暗い格納庫の中で、武雷我の前に立っていた。

「……………何でだろうな、武雷我」

ぼつりと、呟いた。

「これは運命なのか？ それとも皮肉か？ それとも……………」

しばらく間が空いて、

「お前の……………、『望み』なのか……………？」

第三話 Part 1 (後書き)

お久しぶりです。ずいぶんと間が空いちゃってすいませんでした。

らにうつもなるさ」

「なのに学校は普通にあるって、おかしな話」

「まあ、学校には特に被害はなかったみたいだから。それに、普通は国土に侵入される前に対応されてたからな、ヴィレン」

「おゝい。二人とも、元気かね？」

「そうこう話していると、美夏が来た。」

「よ、ナツ」

「ナツ姉！ おっはよ〜」

「2人は元気よく返事をする。」

「わ〜い！ ナツ姉、ハグしてえ〜」

「いいねえ〜！ さあ来るね！」

「雷菜も美夏とは幼馴染で、妹のように可愛がられている。」

「おゝ、よしよしよしね！ いい子だねえ〜！！」

「くう〜ん」

「2人がじゃれ合っているのを見ると、心が落ち着く。実に微笑ましい光景だからだ。」

「（こんな毎日が、ずっと続けばいいなあ……）」

「心の中で呟いた。そこにバスが到着した。」

「お、2人とも。バス来たから行くよ！」

「は〜い！！」

学校に着くと、雷菜の下駄箱には大量の手紙が入っていた。

「あ、あははははは……。これはちょっと……」

「あまりの多さに本人も驚いていた。1回ではとても持ち帰れる量ではなかった。」

「すごいな。これ全部ラブレター？」

「うん……。まさかここまでとは思わなかった」

「しばらく来てなかったからね。ここまで溜まると圧巻だね」
3人は置き場に困りながら、しばらくたたずんでいた。

第三話 Part 2 (後書き)

こんにちは、お久しぶりです。
長い間更新せず、申し訳ありませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6612r/>

最強機神 武雷我

2011年11月3日03時10分発行